

## 湘南の由来とエリアを探る

### その4

#### 元祖・中国の湘南

和田精二

2017.05.15

### 4-1 これまでに分かったこと

「湘南の由来とエリアを探る」も今回で4回を迎えました。これまでの連載を通じて、“なぜ京都に湘南亭があるのか？”“誰が湘南亭と名づけたのか？”“誰が最初に湘南の由来について書いたのか？”“なぜ相模原市に湘南村があったり、今でも湘南小学校があるのか？”などの疑問が解けてきました。「湘南」という地域名はもともと日本には存在せず、中国から渡来した禅僧や日本から渡った僧などが伝え、禅宗を基盤に日本に広がった呼称であることも分かりました。

そうなるとう然ながら、元祖「中国の湘南」とは中国のどの辺にある、どのような地域なのか？というところへ興味の対象が移っていきます。その地域が特定できれば、具体的なイメージも湧きやすく、中国の湘南をメッカとした禅宗を基盤にどのような手段やルートで「湘南」が日本に伝わって来たのか理解でき、小倉村の馬場戸長が湘南村という呼称を発案した背景も何となく、分かってしまいそうです。そこで今回は元祖「中国の湘南」について調べてみました。



図1 湖南省の位置：湖南省 2017.5.8, 22:27 Wikipedia 日本語版

### 4-2 高瀬慎吾が語る 元祖「中国の湘南」

まず最初に、中国における湘南の位置を特定するには、湘南の由来についてはじめて本格的に論を展開した平塚市の郷土史家・高瀬慎吾氏（1900～1991）が湘南地域について記述した文章を再度引用する必要があります。

『中国の地図を開いてみると、揚子江の源流をなす地域に、相模国の倍ほどもある洞庭湖がある。この洞庭湖を北にもつ平原を「湖南」と呼ぶ。ここで広西省の陽海山に発して北流する「湘水（湘川）」が、瀟水に合して悠々と洞庭湖にそそぐのである。その河水は清く澄んでいて、沿岸の風景は変化に富み、絶景八処が撰られ、古来これを瀟湘八景と言う。また、登仙の妙境、衡山のあたりを「湘南」と呼んでいる。碧巖録という中国の禅書の第18則によると、耽源という僧が、唐の皇帝肅宗の問いに対して無造作に「湘之南、潭之北」と、含蓄ある言葉をもって応答している。湘南・潭北は、湘水に沿った都邑、湘潭のあたりにちなむ勝境の雅語である。相模国の「相」を「湘」に、さらに「湘南」と美化粧したものは、大陸の名勝「瀟湘」や「湘南」による詩文などから、かの地に憧憬をもった学僧たちや、鎌倉時代からあいついで来朝した渡来僧などに始まったのではないか。』 「湘南の文学巡り」高瀬慎吾 1968

### 4-3 元祖「中国の湘南」はどこだった



図2 図1を元に湘南と思われる地域を著者が追記

高瀬氏の引用文の内、「登仙の妙境、衡山のあたりを湘南と呼んでいる」という箇所と「湘南・潭北は、湘水に沿った都邑（都市）、湘潭のあたりにちなむ勝境の雅語」という箇所から

「湘南」のおおよその位置が特定できそうです。湘水や湘川は現在「湘江」と称されていますので、これ以降、本文については「湘江」を使用します。

図1に衡山と湘潭市、長沙市を加えたのが図2ですが、湘江に沿って衡山あたりから湘潭市、長沙市を超えて洞庭湖に至るエリアを湘南の中心と特定してよからうと思います。ただし湘南エリアの範囲については判断が難しく、特定できませんでした。「湘」は湖南省の別称(白水社 中国語辞典)といいますが、同省のかなり広い範囲を湘南としていた可能性もあります。この辺りについてはさらなる文献調査が必要です。



図3 長沙市を流れる湘江 湘江 2017,5,10 19:10 Wikipedia 日本語版

ついでながら、高瀬氏の文章以外に湘南を特定できる説明を探りましたが、広辞苑の「中国湖南省の洞庭湖に注ぐ湘江の南方一帯の景勝地の称」や“湘南” 2017,5,10, 17:27 Wikipedia 日本語版 の「湘南とはもともと現在の中国の湖南省を流れる湘江の南部のことで、かつては長沙国湘南県が存在し、中世には禅宗のメッカとなった」が新鮮に思えるぐらいで、他の文献(当シリーズ第2回に記載)やネット情報は大半が高瀬氏の文章の引用またはそのまた引用であるようです。

湘潭市は湖南省の省都・長沙から南へ40km、湘江の中流に位置する人口300万人弱の都市で、長沙市、株洲市と共に「湖南省の経済発展三角地帯」を形成する工業都市です。湘潭市の歴史は古く、唐代に湘潭県が設けられて以来、今日に至るまで1,300年以上も同じ地域名称を保持しています。湘潭という名前の由来は、湘江の支流に多くの潭(深い淵)があったこととも関連しているようです。約5,000年前から人が住んでいたともいわれており、紀元前1,600年頃の青銅器も出土しています。最も重要な輸送手段であった水路が発達していた湘潭は、明代末には商業の中心として栄え、湘江に沿って多くの港が開かれていました。湘潭市は、現在、滋賀県彦根市と友好都

市の締結をしています。

#### 4-4 革命家を輩出した湖南省

湖南省の省名は省内の大部分の地域が洞庭湖の南側にあることに由来しています。その湖南省が誇るのが米の生産高ですが、中国には「湖広熟、天下足」または「両湖熟、天下足」という言葉があって、湖南省と広東省または湖南省と湖北省で水稲がたわわであれば全国への食糧供給は問題ないという意味だといえますから、洞庭湖の周囲にいきなり肥沃な土地が広がっているのかが分かります。



図4 衡山(1300m): 衡山 2017,5,10 21:12 Wikipedia 日本語版

湖南省は、その風光明媚な景勝地としてだけでなく、毛沢東が旗揚げした地として知られていますが、毛沢東だけでなく、劉少奇、賀龍、胡耀邦、華国鋒等々の革命家を輩出したと聞くとちょっと驚きです。こうした大物政治家を輩出した土地柄だけに、古い計画経済時代の考え方に束縛され、主要食糧生産基地という地位に甘んじ、改革・解放の先端を走る隣の広東省に大きく後れをとり、深圳など広東省の工業地域の労働集約型産業を支える低賃金出稼ぎ者の供給基地となり下がった一面もあります。

湖南省衡陽市南嶽区に位置する最高峰1,300mの衡山は、中国の道教の聖地である5山の総称・五岳(ごがく)の内の1つの聖山として知られています。湘江に寄添うかたちでそびえています。「登山の妙境、衡山のあたりを湘南と呼んでいる」とあるように、古来、湘南地域の景観を形成するだけでなく、道教の聖地としての存在感も大きかったです。

#### 4-5 湘江と瀟水が合流して注ぐ洞庭湖

湘南の景観を構成してきた湘江は、南の陽海山を水源とし、湖口市などを経て長沙市の西を流れ湘潭県に至って青草湖と合流し洞庭湖に入る湖南省最大の河川です。全長 817 km、流域面積 9.6 万㎡、支流が 2,157 あるとされています。

2,157 ある支流のうちの最大の支流こそ、高瀬氏が、「湘水（湘川）が、瀟水に合して悠々と洞庭湖にそそぐのである。その河水は清く澄んでいて、沿岸の風景は変化に富み、絶景八処が撰らまれ、古来これを瀟湘八景と言う。」と表現した湘江最大の支流「瀟水」です。この「瀟水」と「湘江」が合流するあたりは、「瀟湘」と呼ばれ、中国の山水画の伝統的な画題となった風光明媚な地域というだけでなく、かつては楚の中心地として栄え、豊富な伝説や神話に彩られた地域でもあります。



図5 長沙市を流れる湘江：湘江 2017,5,10, 21:20 Wikipedia 日本語版

また、湘江が注ぐ洞庭湖は、長江（揚子江）の中流域に広がる湖水地方（江漢平原）の中でもひととき大きく名高い湖で、江西省の鄱陽（はよう）湖に次ぐ中国で 2 番目に大きい淡水湖です。面積は洪水期には約 3,000 平方キロ、増水期には約 4,000 平方キロといえますから、東京都が 2 つすっぽりおさまるほどの大きさで、この湖を境に北は湖北省、南は湖南省と省名が分かれます。春秋時代、秦に滅ぼされた楚の国があったのはこの一帯で、憂国の詩人屈原が入水した汨羅江（べきらこう）もこの洞庭湖に注いでいます。

楚の地に伝わる湘妃などの神話、桃源郷をはじめとする伝説、およびこの地を流浪した屈原の詩等により、風光明媚な湘江・洞庭湖の地域（=湘南）は神話的想像力や詩的想像力をかきたてる土地とみなされていました。

屈原の「楚辞」等には、伝説上の皇帝堯（ぎょう）の娘 2 人である湘君・湘妃の物語が幻想的に詠われています。2 人の娘は次の皇帝舜帝の妃娥皇・女英となり、夫の舜が遠征の途中、湘江の畔で命を落とすと、後を追って洞庭湖に身投げしますが、

水死した娥皇は「湘君」、女英は「湘夫人」と呼ばれ、湘江の“川の神”となった伝説として伝えられています。斑竹（別称：湘江竹、湘竹、淚竹）の表面にある斑紋は、娥皇と女英の涙が落ちた跡が残って斑になったという言い伝えもあります。

#### 4-6 禅僧がつなく「中国の湘南」と「日本の湘南」

そうした湘南の地域も、隋唐時代までは少数民族が居住する土地でしたが、宋代以降漢族が多数移住してから発展を遂げました。開封に都を置いた宋朝は遼・金などの北方異民族との領土抗争に苦しみながらも、北宋として約 150 年の比較的充実した政治を行いました。芸術を愛した風流皇帝の徽宗（きそう）が金によって北方に連れ去られた靖康の変（1126）以降、江南の杭州に都を移したいわゆる南宋も、次第に国力を疲弊させ

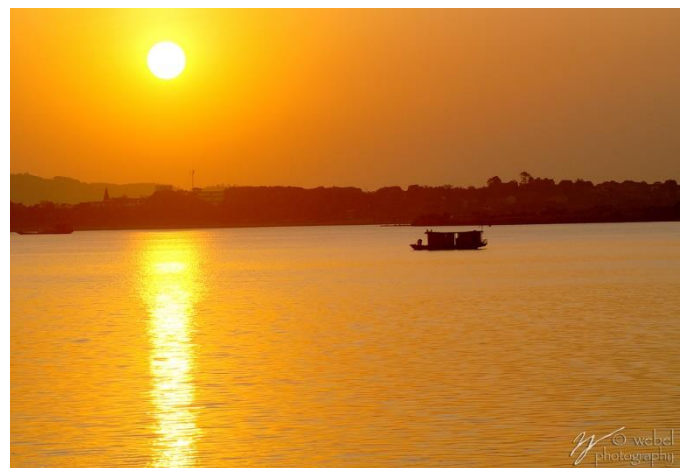


図6 洞庭湖の夕景：洞庭湖 2017,5,10, 20:27 Wikipedia 日本語版

ながらも、かろうじて国家を維持できたのは、宋朝は唐朝とは異なった新しい政治・経済機構とそれによって生み出された新たな文化を培ったからといえます。

とくに太宗は国家の充実と安泰に力を注ぎ、知識人と僧侶を集め、史書・辞典の編さんや経典の翻訳を官位で行いながら、文化政策で知識人の不満を吸収しました。唐のように同族の王侯・貴族で政治体制を維持・運営せず、科挙という官吏登用試験を用いて優秀な人材を集め、行政職として能力を発揮できる制度を作り上げました。

こうした制度化で有能な官僚集団を形成した人々に、原理原則に縛られない空・無を逆説的に主張する禅仏教が関心を持たれたため、宋代政治を事実上支えていた有能な官僚集団や文人層とさかんに交流する禅僧が現れたともいえます。一方、この

禅仏教を日中交流面からみると、鎌倉時代には、主に南宋の禅僧が来朝するケースと日本の禅僧が求法入宋するケースがありました。このうち、宋代文化の代表ともいえる水墨画や詩・書にすぐれた禅僧が日本に新天地を求めて渡来するケースが多かったようで、このため禅宗が日本の文化に与えた影響がとてつもなく大きい結果を及ぼすことになりました。

さて、ここで問題になるのは、「中国の湘南」から日本に対していかなるかたち・ルートで「湘南」というイメージが伝わっていったかを、具体的に例証していくことですが、次回以降の課題といたします。

#### 出典資料

- ・湘南の文学めぐり 湘南紀行文学会同人編 1968
- ・中国全省を読む地図 莫邦富 新潮文庫 2001
- ・日中を結んだ仏教僧 頼富本宏 農文協 2009
- ・湘潭市/彦根市ホームページ 2017,5,12 22:27
- ・図1/図表：湖南省 2017,5,8, 22:27 Wikipedia 日本語版
- ・図3/写真：湘江 2017,5,10, 21:20 Wikipedia 日本語版
- ・図4/写真：衡山 2017,5,10 21:12 Wikipedia 日本語版
- ・図5/写真：湘江 2017,5,10, 21:20 Wikipedia 日本語版
- ・図6/写真：洞庭湖 2017,5,10, 20:27 Wikipedia 日本語版
- ・引用文：湘南 2017,5,10, 17:27 Wikipedia 日本語版